
リトルバスターズ×CLANNAD

鈴仙 R

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リトルバスターズ×CLANNAD

【Nコード】

N6262Z

【作者名】

鈴仙R

【あらすじ】

交わるはずのない二つの世界が今交わる

第1章（前書き）

「恭介！！恭介！！いるんでしょ！？」

「なんだ理樹朝っぱらから…って何だあ！？」

いつも見慣れたはずの廊下それはそこにはなかった

「ここも新しい世界なの！？」

「それにしても安定しすぎている…どうなってんだこりゃ…」

「朝からごちゃごちゃとうるさいねえ…一体なんだよ…」

振り向くと見慣れない生徒…金髪で結構童顔に近い顔

「ん…見ない顔だね…転校生？」

「え？いやちが…」

「そうだ転校したばかりなんだ」

理樹の言葉を遮り恭介が言った

「ふ…ん…ああそうそう僕は春原陽平って言うんだよろしくね」

「棗恭介だ」

「直枝理樹です」

「棗に直枝ねOKOKじゃ、僕はもう一眠りするからね」

何が起こったんだろう僕たちの身に…

そうして少ししてから僕たちは鈴、謙吾、真人

元祖リトルバスターズと合流した

第1章

「ん？なんだ？いつもより人が少ない気がするな？」

「そうですね朋也くん」

「な、渚！？お前なんでここに？」

「朝自分のクラスにいたらあなたは違うクラスでしよって言われて名簿を見たら朋也くんと同じクラスで…」

「なんなんだ…一体…」

「それに…ほら…」

「杏！？ことみ！？」

「みんな同じクラスになってます…」

「朋也くん…なにがあつたのでしょうか？」

「んなこと俺に言われても」

「一体何が起きたって言うんだ？」

「おはよう」

「ん？春原か…」

「おはよう岡崎、渚ちゃんに杏、ことみちゃんも」

「春原、今の状況を見てなにも不自然におもわないのか？」

「何が不自然なのさ？」

「ことみや杏、渚までもが同じクラスなんだ」

「なにいつてんの？そんなもとからじゃん」

俺は春原が何を言っているのかまるで理解できなかった、渚たちがもとから同じクラス？

そんなバカな…

現に渚はクラスを間違え注意をうけた、俺と渚以外の記憶が改変されたのか？

第2章

鈴「で、なんでこうなったんだ？」

真人「まあこれはこれでいいんじゃない？」

謙吾「もつと深刻な問題だぞ」

恭介「まあ俺としては新鮮な感じでいいと思うがな」

なんでこんなことに、僕たちは今3年生の教室にいる

恭介はともかく僕たち2年がここにいることに異変を感じる

とにかく各自自己紹介をして席につく。

奇跡的にみんな席が近くてよかった

授業は壊滅的だった。真人を見ると、真人は白くなっていた
とにかく自主勉が大変そうだな

できれば、早めに僕たちの世界に戻りたいな

なんだか大勢の転校生が来たな…

見覚えのない制服だな県外からか？そんなことを考えていたらいつの
まにか授業は終わっていた

朋也「じゃ部室にいくか？」

渚「そうですね…部室にいきましょう」

二人で部室に…ってみんな同じクラスだからみんなを呼んでからい
くか

春原「おいおい…これはどういうことだ？」

一足先に来ていた春原が驚いていた

朋也「どうした春原…っておい…マジかよ…」

杏「部室がなくなってる？」

棕「よく見てください、演劇部の部室だけじゃないみたいですよ」

よくみると所々学校が変わっている

春原「朝から杏たちが同じクラスだったり、今日は変なことばかり

だね」

朋也「春原：お前思い出したか？」

春原「よく考えたら違うクラスだったことに気づいた」

渚「とにかく原因を調べましょう」

その必要はないぜ

振り向くとそこには転校生、棗恭介が立っていた

朋也「どういうことだ？転校生」

恭介「棗恭介だ、恭介でいい、とにかくそっちの方も自己紹介から頼む」

俺たちは各自自己紹介をした

そして恭介から聞いた話は現実に起こりうらないような内容だったことみがなんだかとても嬉しそうだった

鈴「なんだ恭介緊急収集って？」

恭介「協力者だ、こいつらはこの世界の住民だ」

とりあえずは互いに自己紹介をする

恭介の調べによると僕らの世界と、岡崎さんの世界に歪みができて世界の一部が混ざりその一部の人間が巻き込まれた世界、つまり歪みを直せば世界はもとに戻る…と言うことだった
衝突した僕たちの世界は一部でしか原形がなかった

歪みの改善は恐らく互いの世界に存在しなかったものを見つけること

僕と恭介、鈴、岡崎さん古河さんのグループと

真人、健吾、春原さん藤林さん一之瀬さんのグループに別れて探索を開始した

真人組

掠「それにしても信じられませんか、他の世界があったなんて」

ことみ「私は信じてたの、お父さんとお母さんの研究が実現したの、とってもうれしいの」

杏「ことみが驚かないのは納得だけど、なんで真人と謙吾もあまりどうようにしてないの？」

真人「それは俺が筋肉だからだな」

謙吾「まあこのバカはほつといて俺たちはこんな体験が初めてじゃないからな」

春原「へーなんかかつこいいな」しばらく歩き続けるんだが、結局見つからなかったわけだ、

真人「ほんとにあんのか？」

棕「恭介さんが嘘をついてるとは思えませんし…」

謙吾「あの恭介の言ったことだ偽りはあるまい」

真人「は…俺は今天才的なアイデアが浮かんだ」

春原「なんだよ井ノ原？」

真人「この学校の壁を片っ端から壊したら見つかるんじゃない？」

春原「おっ！ナイスアイデア？」

謙吾「何を言い出すのかと思ったら…」

杏「それに同意する陽平もね…」

謙吾&杏「アホだ…」

真人&春原「うおおお？ダブルで言われたからなんかダメージ大きくなってる？」

ことみ「類は友を呼ぶ…なの」

棕「私たちの方は何もなかったので恭介さんたちと合流しませんか？」

謙吾「うむ、それが妥当だな」

恭介組

恭介「どうだ岡崎なにか見覚えの無いものはあるか？」

朋也「これといって何もないな」

理樹「作られた世界じゃないからマスターって訳でもないよね」

恭介「その可能性は0に等しいな」

鈴「恭介たちが何を話しているかよくわからんのだが」

渚「私もあまりわかりませんか？」

恭介「まあとにかく歪みを見つけるとしようか」

探し続けて約30分

鈴「なんだあれ」

鈴が指差す方には、丸い…だんご？

渚「あれはだんご大家族です、この世界では普通にいます」

鈴「そーなのか？」

鈴が岡崎さんの方を見て聞いた

朋也「そんなわけあるか！」

理樹「あ…逃げた」

恭介「追うぞ！！」

だんごは思いの外速い…

朋也「渚！だんご大家族は足が速いのか！？」

渚「わ、わかりません？」

理樹「このままじゃ見失いそうだよ！」

だんごの前に巨体が2つ立ちはだかった

真人組のメンバーと合流したようだ

真人「なんだ？この得体の知れないのは？」

謙吾「恭介？こいつがこの世界の歪みか？」

恭介「ああそうだ！！頼む」

真人&謙吾「わかった！！」

と、だんごに向かって飛びかかろうとしたとき

渚「やめてください？」

朋也「渚？」

渚「だんごは大家族なんです？一人かけてもダメなんです？だからだんごをいじめるのはやめてください？」

恭介「しかし、こいつをどうにかしないと…」

鈴「恭介、あいつなんか持つてるぞ」

よくみるとなにか光るものを持っている

渚「だんごさん、それを渡してくれませんか？」

だんごは少し戸惑ったが渡してくれた

杏「鍵？」

棕「演劇部部屋って書いてますね」春原「ってかいつのまにか僕ら
部室の前にいるじゃん」

と春原が鍵を開けたとたん

春原「のわあああああ？」

理樹「うわあ……」

鈴「大量のだんごだな」

だんごは嬉しそうに大量のだんごのもとに駆け寄って消えた
すると……

朋也「いつもの学校だ……」

恭介「戻ったのか？」

杏「みたいね……」

歪みは修正されたが僕たちはまだ残っている、

真人「どういうことだった？戻れねえぞ？」

謙吾「戻る方法は別……ということか」

すると不意に僕の携帯が鳴り始めた

第3章

小毬「あ、やっと繋がったよ、ゆいちゃん、繋がったよ」

理樹「小毬さん？」

恭介「どういことだ理樹？」

理樹「ちよつと待って、テレビ電話に切り替える」

来ヶ谷「ハッハッハ久しぶりだな諸君」

真人「そういうのはいいから早く用件を頼むぜ」

来ヶ谷「む、すまないこつちの世界からの干渉が許されなかったのか、今まで連絡不可でな」

謙吾「しかし連絡可能となったと言うことは、なにか干渉できるの
だろう？」

来ヶ谷「うむ、そう言うことだ、そこから出るにはその部屋の中に入ることだ」

真人「なんだ簡単じゃねえか」

と真人が入り、消えた

来ヶ谷「少年真人は人の話を最後まで聞かないな、続きだが、一度
そこから出たら二度と戻れん、別れの挨拶くらいしてこい」

理樹「ありがとう来ヶ谷さん」

朋也「いつちまうのか？」

恭介「ああ、みんなが待ってる」

渚「できれば演劇部に入ってほしかったです」

鈴「悪いが私はそういうの怖い」

渚「即答されちゃいました」

春原「井ノ原に伝えてよ…気が合いそうなバカだったって」

真人「お前もな」

電話越しに真人が言う

理樹「短い間だったけどありがとう」

杏「夢なんじゃないかって今でも思ってるわ」

棕「でも、紛れもない現実なんですよね」

謙吾「そうだ、またいつか会えると良いな」

ことみ「きつと会えるの」

恭介「さて、名残は尽きないがそろそろいくか」

朋也「元気だな」

恭介「おう、あばよ」

別れ際みんなが手をふって送ってくれた

こんな世界もあったんだな

みんないい人だったな、短い間の思いで忘れないよ

気がつくと僕はもとの世界に戻っていた

寮のベッドで寝ていたからほんとに夢じゃないかと疑った、でも、夢じゃないよね

またいつか…きつと僕ら会えるよね

きつと会えるさ

THE END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6262z/>

リトルバスターズ×CLANNAD

2011年12月20日23時36分発行